

G

H

L P H

H

A

## 安部飛翔

Hisyov Abe





1

ディラク島

れた街道を歩むが如く、苦もなく進んでいる。(只人なれば足を進めることすら不可能であろう険しい道のりを、どこまでも深い樹海。

スレイー行は、整えら

とても人とは思えぬような、軽やかな足取りだ。

いくら進んでも変化のない、密林だけが続く風景――菩標となる物など何一つないというのに、迷うことなく、

-普通の人間ならば、とうに感覚を ただ感覚のままに突き進む。

狂わされている筈だ。

海の奥深くには入り込めないようにする術が掛けられていた。 だがスレイにとっても、、欲望の邪神、ディザスターにとっても、 しかもこの樹海には、SS級相当探索者すら惑わす高度な幻術と、 時空間を操作

時空竜フル ールに

とつ そんな物は何の意味もない

6

気配により簡単に見定められた。 彼らに干渉しようとする術式は、 難なく無効化されている。 加えて、 進むべき方向は

撒くことも容易だっただろう。 \* いいだけだ。しかもそうすれば、 本来この面々であれば、 一々歩く必要すらない。 スレイ達を監視しようと後を付けてきていた 感じている気配の元へ、 一気に跳べば "忍』達を

童の行う悪戯の類に過ぎない そうしなかったのは、この状況がスレイにとって遊びのようなものだからだ。 それも

とを、 れて、 だて、道なき道を進んでいる。しかし、ただ無造作に森の奥深くに踏み込んだ訳スレイは今、わざわざ自分達を招待するかのように術が解除された樹海の入り ディラク島全土に張り巡らされている、眼、と、 スレイはあっさり見破っていた。 -前者は 『九尾の狐』 の眼であり、 後者はその傍に居る霊狐の眼であるこ この樹海のみに張り巡らされている  $\Box$ ではない。 か ?ら外

実は樹海の外に居た時から既に、密かにそれら二つ 0) 順 を惑わ し始め 7 た 0 ぞ

つまり、 視み 「用意された入り口から、 せる、 などという真似をしているのだ。 開かれた道を進んで いくスレイ達」 という幻の姿を

見ていた。 ディザスターとフルールは、 類稀な幻術の使い手を、逆に幻惑して楽しんでいる。 そんな子供じみた悪戯に全力を尽くすスレイを呆れた目で

スレイはふと立ち止まり、樹海の内外に感覚を広げる。

、忍、達は、スレイの行動を受けて、二つのグループに分かれて行動してい

も挑戦を繰り返した末、 れた幻術と時空間操作の術に惑わされ、樹海の外に放り出された。それでも懲りずに何度 馬鹿正直にスレイ達の後を追って樹海に入った、忍、達は、 やっと追跡は不可能だと悟ったようだ。 たちまち樹海に張り巡らさ

切り替えの早さだ。 ら去った。主であるノブヨリに報告する為に戻ることにしたのだろう。 そのグループの、忍、達は暫し呆然とした後、 樹海を監視する為の一部を残して樹海か 密偵のプ ロらし

彼らのような生業の者ならば当然のことだ。 入った。このように複数の手段でアプローチし、 任務失敗の報告をせざるを得ないとはいえ、そんな彼らはまだ幸運な部類だと言える。 もう一方のグループの \*忍、達は、スレイの為にわざわざ用意された入り口から樹海に 目的の達成確率を上げようというの

ループさせられ、 彼らは今、 っれ、行けども行けども変わらぬ景色の中を、延々と歩み続ける羽目に陥って九尾の狐が時空間を操作し創り上げた循環する時空の歪みの中で、完全にからなが、

13

と九尾の狐は考えているのだろう。 への軽い罰として、 スレイ達の為に用意された入り口に、 スレイが自分の元へ辿り着くまでは、 招かれざる客として無遠慮に踏み入った ループの中に閉じ込めておこう

常の状態へ戻し、 術が張られた樹海の只中を強引に突っ切り、 れるだろう。 スレイがこのように邪道な方法で迫っていると知ったなら、九尾の狐はすかさず樹海を が張られた樹海の只中を強引に突っ切り、真っ直ぐに九尾の狐の元へと向かっていしかし実際は、スレイ達は用意された入り口や道などを無視して、幻術と時空間操 忍 達はすぐさま幻術と時空間操作の術に惑わされ樹海から放り出さ 幻術と時空間操

それはつまり、 少なくとも無限に続く時空のループの中からは解放されるということに

考えつつも、 理由で終わりなき道を無意味に歩み続けなければならないとは貧乏籤に過ぎるな、 、忍、として自己の命を投げ出すことも厭わない訓練を受けているとはいえ、 \*眼、に、「用意された道を進むスレイ一行」などという幻を見せているからだ。 、忍、達が時空のループに閉じ込められているのは、 スレイには、忍、達を解放してやる心算など毛頭なかった。 スレ イが遊びで九尾 そのような

それよりも……と、 自らの感覚をより研ぎ澄まし、 脳裏に浮かぶイメー ジを明確にする。

そこだけ草木も生えず、 九尾の狐と霊狐、二つの気配が感じられる場所があった。 硬い土がむき出しになっている。 あたり一帯が大きく開け

てお

その中心に存在するのは巨大な木造の屋敷 まるでちょっとした広場のようだ。 それこそがスレイ達の目指している場所

しかも未だ生きている。 使われている建材は、 どうやらただの木ではない らしい。 相当な樹齢の の神木の類であ

していた。 が屋敷の中から発せられていることだ。それこそが九尾の狐に違いない、 、識、ろうと思えばもっと深い情報も得られたが、ス それよりも注目すべきは、先程から感じている二つの気配のうち、 レイはその必要はないと判断した。 途轍もなく強大な方 とスレ イは断定

ならば、最初は直接この目で見なければならない。 その姿を仔細に 九尾の狐は、その力もさることながら、恐るべき美貌でつとに名高い。それ程の「羊その姿を仔細に、視』ることも可能だが、そんなことをしては勿体ないと却下する。またら、またり、またり、またり、またり、またり、

屋敷の門前には、九尾の狐とはまた別の気配があった。

こちらが霊狐だろう。

その気配は九尾の狐と比べて明らかに微力であるが、 それは比較する相手が悪いだけで

の格で考えれば、 かなり高位の存在であると分かる。

かも女だと分かったからだ。 この霊狐の姿も、スレイはやはり ずに済ませる。 霊狐が人化した化生であり、

しみたい。 九尾の狐程ではなくとも、 相当の美貌であることは必定。 初対面は、 やはり生で見て楽

ろう。 しかし霊狐が門前に立っ くい るということは、 スレ イを出迎える為に待っ 7

施していたのだから、 わざわざ樹海に入り口を用意し、 間違いあるまい ご丁寧に屋敷までの道を開くなど、 招き入れ る準備を

九尾の狐の元にやってくることは、大分前から分かっていた筈だ。 それに何よ 九尾の狐の〝眼〟 は、ディラク島中に張 り巡らされてい

ていた。 スレイ自身、 クランドとの戦いを終えて落ち着いてからは、 九尾の狐の視線を常に感じ

気にする余裕が生じたと言った方がより正確である。 や、それ以前も感じてはいたが、気にしていなかっただけで、 死闘の興奮が覚めた今、

一人、色々と納得するスレイ。

それにしても、 屋敷の周囲はかなり広々と開けている。 そこまで辿り着いた時、

それではつまらない、とスレイは軽く頷いた。屋敷がある広場の手前の木々 の間から突然姿を現したとしても、 霊狐は大して驚くま . О

狐の視界の外から眼前へと一瞬で移動し、驚かせてやろうか。

と探り、 ることは不可能。だが、霊狐が驚いて少しでも反応したならば、 それは避けたい。 それは容易いことだ。 本物のスレイ達を見つけ、 ならばどうするか……。 何せ九尾の狐にも霊狐にも、 今現在〝視〟 ているスレイ達が幻だと気付くだろう。 今スレイ達がどこに居るの 九尾の狐はすぐに何事か か感知す

答えは簡単だ。

しても仮想の世界を〝視〟るように仕向ける。 スレイが森から飛び出すと同時に広場に結界を張り、 九尾の狐が屋敷の 周囲 に関

高度な魔法に概念操作を組み合わせ、 色々と工夫をすれば、 たとえ神獣であっ ても見破

れない結界を、スレイなら軽く創り上げられる。

に結界内に入ってくれるだろう。しかしまあ、 .結界内に入ってくれるだろう。しかしまあ、こんな悪戯一つに無駄に力を注ぐとは……そして何も伝えなくとも、ディザスターとフルールは難なくスレイの動きに追従し、共 なんと言うか、どうしようもない な。

自分で自分に呆れるスレイ。

と同時にスレイは、 これもまた必要な息抜きか、 何せこれから先、 真調面に 目にやらなきゃ

ならないことが山程あるからな、とも考えた。

12

の物を背負おうとしていたのか、と改めてスレイは驚嘆する。 ンドの思想や希望、 ドの思想や希望、そして成し遂げようとしていた理想――本当にあいつは、どれクランドによってスレイの魂に埋め込まれた、種、。そこから伝わってくるのは、 どれだけ クラ

かなければ、合わせる顔がない。 クランドがこの世界に還って来るまでに、 せめてその一部くらい は代わり に実現してお

とはいえ、スレイの場合は、クランドのように真面目一辺倒になれる訳ではそれが、今のスレイにとって最も大きなモチベーションとなっていた。 今までと同じように、最強を求め、全ての美女・美少女を求める--そうした欲望自体

きと呼ぶのは、この世界であってもスレイぐらいのものであろう。 今回のように、 、 ギス タ 機会があれば息抜きがてらの悪戯もする。 尤も、 神獣相手の悪戯を息抜

を捨て去ることはできない。

……なんにせよ、だ。

これでディラク島の問題はひとまず片が付くとして、次は大陸全土に関わる件 ればならない。まあ、 やる気自体はそれなりにあるのだが、 やはり気が重いこと で色々と

クランドの手によって魂の中に埋め込まれたものについ て思いを巡らせるスレイ。

、種、というのだから、芽吹き、成長し、 スレイからすれば、たとえそれによってクランドからの影響を強く受けたとしても、 やがて何かに成るのだろうか。

くらいは変質するかもしれないが。 の存在の本質まで完全に変質させられることはないという自信がある。まあ、 表層の一部

今のスレイにとって、将来が「未知」 どうなることやら……極一部の例外を除き、 であるというのは実に興味深いことだ。 その気になれば ~全知,

ただ、この状況を楽しみながらも、僅かに不満もある。

スレイにとって一番の望みは、いずれ還って来たクランドと再び戦うことである。 邪神達を悉く打倒すること。三番目は、 あらゆる美女・美少女と呼べるモノを口説に来たクランドと再び戦うことである。二番

並行しながら実行可能なので、 一番の望みを叶えるには、クランドの帰還を待つしかない。 特に問題はない。 三番目は他の色々 なことと

しかし二番目だけは違う。スレイがクランドの代わりに世界の基盤を整える為に動 邪神達と戦う時も世界への影響を考えねばならない。 余計な手間が掛かり、

ままならないな、と溜息を吐く。を待たなければならないだろう。

そんなスレイの肩に、 木漏れ日が降り注 いだ。 鬱蒼と茂る森の中ではあるが、 屋敷に近

付くにつれ、 樹木もまばらになっ て 13

14

スレイは広場の手前に着いたと悟り、 周囲一帯に結界を張った。

の眼前に既にいた。瞬間移動と呼ぶのも生をして、屋敷の門前にいる霊狐を、視なるして、屋敷の門前にいる霊狐を、視ない。 目を見開いて唖然とする少女。 のも生温い、存在そのものの時空間座標の置き換えだ。 据える。 と同時に、 スレイは先程 視

身長はごく普通だが、 霊狐はまさに少女と呼ぶに相応しい、十代後半の人間の姿をしい。 スレイが縁あって出会う女性達の例に漏れず、 てい スタイル は抜群が

で

サラの白髪が ラの白髪が一際目を惹く。肌は抜ける程に白く、切れ長の赤眼とコントラストを成してそのうえ、少女は極めて整った顔立ちで、規格外の美しさだった。足下まで伸びるサラふむ、これも縁に恵まれているということだろうな……などと考えるスレイ。

眼福、眼福、 その身に纏うの は、 恐らく は侍女服だろう。 ディラク風だが何やら色々とアレ ンジされ

と思いながら、 つまり獣の変化の中でも、 期待はやおら高まる。

でもない。 この少女は霊狐 今は隠しているが、 尾の数は四尾と見抜く。 格は決して低くはない が、 高 11

九つの尾を持つという説と、四つの尾を持つという説があった。 り得る知識では、 九尾の狐すら超える圧倒的な神通力を得た ||天狐|

も言われている。 いう話もある。 尾の数こそが力の象徴とも言われるが、 天狐より格が上とされる『空狐』 力極まれば、尾は必要がなくなり減っ は何尾なのか不明で、尾が存在しないと てい

世界の神々、 それは、 スレイの全知を以てして、何故このように不確かな情報しか得られない更には、空狐と天狐の序列が逆転している説すらある。 絶対的に確定した存在である、真の神、を除いて、この世界の神々、そして異 神獣から妖怪、 魔物の類に到るまで、ある程度以上の格を持った高位存在は 0

存在しないのである。 様々な面を併せ持つからだ。一が全で在り、 全が一で在り、 唯一の確かな正解という物が

際に、 伝承によれば、 ヴェスタの影響を受けて存在が変質したという。 遥か昔、 九尾の狐は異世界よりこの世界に転生した。 そしてその転生

0

狐を遥かに超えた格に到っているのだ。 確かに今も九尾の狐というカテゴリーに属したままなのだが、 もはや元の世界で言う空

抜い 目の前にいる少女も、 てい た。 しかし彼女が何の変哲もない普通の霊狐に過ぎないと理解し、 九尾の狐と同じ世界から転生してきたのだと、 スレ 1 一瞬困惑する の眼力は見

もすが

16

身近にいる異世界からの来訪者達も変質などしていない。 により変質することはなかった。そして何よりの証拠に、 あの失われし名持ちの邪龍でさえ、召喚者たる魔術師の干渉がなければ、 真紀やセリカ、 出雲といった、 ヴェスタの力

なのだ。 つまり、 スレイがこれから会おうとしている九尾の狐のように、 変質している方が例外

外の美少女だ。 心中で苦笑しなが やはり自分のモノにしたい 76, 目 の前の霊狐に対する第一声は何としようかと考える。 0

とはいえ、初対面からあまり踏み込み過ぎるのも逆効果となる

「どうも。既にご存知かと思うが、 奇をてらっても仕方がない、結局は無難な挨拶が一番か、 俺はスレイという者だ。道の幻術が解かれていたので、 と結論を出したスレ

招待されていると思い、訪ねさせてもらった。君の名前を聞かせてもらっても構わない ろうか?」

だったのだ。 かった。わざと思いっきり驚かせる登場を演出しておきながら、その効果までは考慮外 しかしこの時、 スレ イはあまりに迂闊なミスを犯していながら、 それに気付いて 11 な

もともと箍の外れた存在のスレイではあるが、 つい .最近、 クランドとともに濃密過ぎる

時間を過ごし、 その緊張が解けたばかりで、 更にねじが緩んでい たのだろう。

「ふあっ!!」

奇妙な声を上げる霊狐の少女。

「ふぁ?」

思わずオウム返しするスレイの目の前で、 少女は腰を抜かしたように倒れかける。

「おっと、大丈夫か……っ!!」

素早く手を掴んで少女を支えたスレイだが、 思わず絶句してしまった

あ、あああああ……」

まっている。 にまで広がっていったのだ。驚きのあまり、 赤い瞳を潤ませ、絶望的な声音を上げる少女 隠していた狐耳と四尾の尻尾も飛び出 その侍女服の股間に染みが現れ、 そし

「あ、その、えーと」

流石に何も言えず硬直するスレイに、 後方からやって来たディザスターとフル ル

『主、いくらなんでもやり過ぎだろう?』呆れたような、非難するような声を掛けた。

おいて、 「っていうかさ、お化けとか暗殺者とか、 普通に挨拶って……しかもその娘、 そんなのも比較にならない程唐突な登場をして 幻影まで見せられて、道から来ると思って

待ってたんだよね?」 しかも並大抵の技術ではない。神ですら軽く暗殺できるレベルである。 そう。そもそもスレイは巧みに幻術を用いて少女を騙し、不意討ちを喰らわせたのだ。

急襲に耐性がある訳もない。 少女とて、霊狐であるからには自分の感覚に自信があったはず。その感覚を裏切っ ての

だった。 「そうか。 自らの迂闊さと、 よっぽど生物として普通の身体機能を有しているのか、 兵器として改造された探索者よりも、 最悪のファー ストコンタクトに、 自然な霊的進化によっ 思わず額に手を当ててぼやくスレ やってしまったな」 て生まれた 0

2

擦り寄ってくる。 ス あれから暫し経ち、スレイは現在の状況に少々困惑していた。 レイの胸元にすがり、 名をクズハというらしい。 頬を染めながら、 耳や尻尾をもはや隠そうともせずに、 潤んだ瞳で真っ直ぐ見上げてくる霊狐の少女 どこか甘えるように

衣服の汚れや地面の染みは、 既に消えてなくなっていた。

それなりに強大な力を持った存在である。自分の粗相の始末を付けるなど簡単なことだ。 「霊獣は格が低い」と言うのはあくまで神獣と比較した相対的な話であって、 問題はどうしてこのような状況になったかである。 スレイはそれを思い返す クズハとて

まずスレイは思いっきり睨まれた。そして問答無用で襲われた。

ことに罪悪感を覚えた程だ。 まあ、当然だろう。全てスレイが悪い。 スレイ自身、 少女をここまで驚かせてしまった

認識したとしても、それすら制御の内ではある。 考え、軽く流していただろう。スレイの精神制御は完璧すら超えているので、 らの変化に気付く。 スレイは霊狐の少女が涙を流しているのを見て、 今までのスレイならば、何があろうと最後に帳尻を合わせればい 自分の心が痛むのを感じた。 心の痛みを そ L で自

な心持ちになって苦笑した。 これもクランドの置き土産か、 だが、痛みを心に感じるー -というのはスレイにとって、 とスレイはどこか嬉しいような、 異常の極致だった。 憎らしいような不思議

ろう。 それを見て、 クズハの攻撃はいっそう激しさを増した。 馬鹿にされたと誤解 したのだ

レベルである。軽く受け流し、適当にあしらって見せる。 霊狐が いくら強大な力を持っているとはいえ、 所能な スレイからすれば話にならない

20

クズハは、自分の力が全く通じないので、 今度は本格的に泣き出してしまった。

スレイの困惑も極まる。

淑やかで、落ち着きがあるようだ。
とと
ズハは初々しい見た目に反し、精神的には相当成熟した大人の女性だった。元来の性格も、ズハは初々しい見た目に反し、精神的には相当成熟した大人の女性だった。元を20 レイは相手の性格、成熟度などを、 見ただけで容易く推 し量が れる。 それによると、

そのクズハがまるで子供のように泣きじゃくって 13

スレイは慌ててクズハの元に歩み寄り、慰めの言葉を掛けた。

と同時に、この状況を逆に利用して口説き文句を口にする 何せこれだけの美少女だ、

スレイとしては口説かずにいられない。

手に、 クズハは、人間を警戒する小動物のように怯え、同時に怒っている。そんなクズハを相 酷い目に遭わせてしまったことを詫び、 本当に一歩一歩、 心の距離を縮めて信頼を

積み上げ、 更に好意すら勝ち取っていかねばならないのだ。

時にはスレイ スレイは徹底して地道に、忍耐強く、 の言動の所為で弱った相手の心の隙を突く、 ¬の心の隙を突く、ある意味卑劣な急所攻撃もした優しく誠実に聞こえるような言葉を重ねていく。

図がる。 そして名前を聞き出し、 イの巧みな誑かしは功を奏し、クズハの心の防壁は崩れていった。 名を呼んで親しみを感じさせながら、 少しずつスキンシッ

ス

最初はほん の少し頭を撫でただけでも警戒された。

それをまた口説き文句の攻勢で緩め、そっと僅かにクズハの身体に触れる。

現在。 そんなことを繰り返し、 本当に気の遠くなるような時間をかけて苦労を重ねた結果が

なった。 狐耳や四 尾の尻尾に触れ、 撫でたり握ったりしても、 クズハは大人しくされるがままに

スレイを受け入れたのだ。それどころか、 うっとりとした表情でスレ イを見上げ、 目を

潤ませている。

この甘えっぷりはどうだろう。いや、 美少女に甘えられれば当然嬉しいのだが

絶対だ。 クズハが本来、 落ち着いた大人の女性だという見立てに間違いはない。 スレイの眼 労は

存在で、その名をタマモという ら察するに、クズハが仕える九尾の狐――クズハにとってはそして本来、クズハがこのような甘えた姿を見せるのは、 と一緒に居る時に限られるようだ。 -クズハにとっては主でありながら姉にも等しい 先程まで交わ そ 13

ぶまい。 いうことになる。 もはやクズハは、心から慕っているタマモと同じくらいスレイを信じていると かや それは違うか。 信頼、 という意味では、 スレイはタマモに遠く及

異性に対するあからさまな好意が見え隠れしている。 クズハがス レイにこんな姿を見せるのは、 V わ ゆる恋愛補正という代物だろう。

染みのない世界で途方に暮れていた二人をこの樹海の奥に匿い、住居を用立てた男だけらょ だが、多少時間を掛けたとはいえここまで惚れ込まれると、流石に戸惑いを覚えた。この状況自体は嬉しい。スレイが全身全霊を尽くして目指した理想的な結果だ。 いた話によると、 タマモとクズハがこの世界に転生してから接した他人といえば、

対する免疫がなく、 タマモとクズハの二人は、 、無防備であっても仕方ない 以来ずっと樹海の奥に引き籠もって いたというから、 他人に

ないらしい。 そして存在の格の違いか、タマモはその男のことを覚えてい これらの点を考慮すると、 クズハのこの免疫のなさにも納得がいくというも いるが、 ク ズハ は全く記憶に

しかし、とスレイは眉を顰める。

タマモとクズハ にこの地を与えたその男の名は、 オメガ、 というそうだ。

これも因縁か、と思う。

クズ それはともかくとして、 ハに対して良心が咎める、 話を戻すと、今スレイを最も困惑させて ということであった。 13 るのは、

説き落とした結果である。 クズハの甘えるような表情は、そもそも自分がクズハを驚かせ、その 普通の人間ならば、 良心が咎めて当然だろう。 心 の隙を突い

。悪事に手を染めるとか、姑息な真似はしないというだけだ。 だが、そもそもスレイは普通ではない。欲しいと思った女を口説くのに、 手段を選ば な

時々に於いて最適な場所を用意し、 スレイはありとあらゆるシチュエーションを演出し、相手の心理状況を利用する。 最適な口説き文句を聞かせ、 手間も時間も全てを借 その

ズハを口説き落とすプロセスでは、 まあ多少は卑怯な方法を取ったかも しれ な 13 が

まずにモノにする。

悪事を働いたという程ではない。ギリギリセーフだろう。

なくなった筈だ。 良心が咎めるというのはおかし い。第一、 良心などとい う感情は、

それが何故こうなっ たの かと言えば、 と考えるまでもない。 答えなんて決まりきっ 7

この良心もまた、クランドが残したものだろう。

23

またも苦笑を漏らすスレ

こが最大の問題かもしれないが。 はてさて、 かなる変化もクランドから齎されたものだと思うと、 これから先自分はどれ程変化するのだろうか、 全く悪い気がしない

そんなことを考えていると、 クズハが不思議そうな表情でスレ イに尋ねた。

「スレイ様、どうかなさいましたか?」

女性の風情であった。 相変わらずスレイに甘えながらも、その口調は、 スレ イ の読み通り、 落ち着いた大人の

そんなギャップに感じ入りつつ、 スレイ は答える

「いや、なに。 大切な男のことを考えてい ただけさ\_

その言葉に、嫉妬の表情を浮かべるクズハ。

スレイの言った「大切な男」とはクランドのことだが、 クズハ は 「大切な女」 い

顔になるディザスターとフルール スレイはわざと誤解を生じるような言い 方をして、 クズ 71 の機嫌を損ねた。 思わず呆れ

しかしスレイは、敢えて誤解を解こうとしない。 その方が都合がよいと考えたのだ。 実際多くの女性と関係を持っ てい

に、その女性関係には諦観を抱かせるように持っていく。 の手で機嫌を取る。更には、自分の女性関係を徐々に明かし、スレイへ 自分を嫌うのではなく、 嫉妬するように仕向ける。次に嫉妬を和らげる為に、 の好意はそのまま あの

事である。
「「おいでは何の変わりもない。ただ霊獣の方が、難易度がやや高いというだけだ。」「スレイにしてみれば、自分に惚れた女を嫉妬さまことできいというだけだ。」「いては何の変わりもない。ただ霊獣の方が、難易度がやや高いというだけだ。いては何の変わりもない。たぜ霊獣の方が、難易度がやや高いというだけだ。 ※か時を生きる霊獣とはいえ、その知性は人間

こうしてスレイは、自分にとって都合の良い状況を作ってい

いくのだ。

事である。

ことをしてくれたものだ。 ことをしてくれたものだ。苦々しく思うと同時に、嬉しくもなろしかし今は、やや良心の呵責を感じるようになってしまった。ディザスターとフルールが呆れたような目で見るのも、いつもディザスターとフルールが呆れたような目で見るのも、いつも しく思うと同時に、嬉しくもなるという、 つものことだ。 クランドのやつ、 厄介な心理状態

に再び陥るスレイ。

拗ねて甘えてくるクズハの耳や尻尾を手で愛でてやり、彼女だが、いつまでもクランドに気を取られていても始まらない スレイは、クズハが泣き止み嫉妬が収まってからも、屋敷の方に彼女の意識が向か 延いてはタマモのことに思考が到らぬよう、巧みに心理誘導をしていた。 彼女の気を落ち着かせた。

容易くできることではないが、スレイならば不可能ではない

26

やがてスレイは、そろそろ頃合いかなと見計らい、こう聞いてみる。

「それでだな、 クズハ。屋敷の主である神獣、 九尾の狐のことなんだが、 タマモで良か 0

0

たな? 途端、ビクンッと身を跳ね上げるクズハ その女性に会いたいんだが?」

見るとその顔は青ざめ、 身体は微かに震えている。

全くなかったのだから当然だ。 これまでのスレイとの遣り取りを、 第三者-九尾の狐に見られているという意識

九尾の狐を恐怖しているのではない。羞恥とも違う。 なんとも言い表しが

の念は大きすぎるのだろう。だから単純な言葉では表現できないような複雑な心情になる。 ど、 恐怖や羞恥などというありきたりな感情を持つには、 どうしましょう、 スレイ様? わ、 私、 あんな醜態を。そ、それにお客人をご案内 クズハがタマモに抱く尊敬と親愛

もせず……」

哀れにも震えながら、 クズ ハはス レイに縋るように問い掛けてくる。

これは、スレイにそれだけ心を許しているという証拠だ。

スレイがあらゆる手段を用いて、 心理操作をしながら口説いたのだから、

もはや、 完全に惚れさせた。

しかしそれがまた心に痛みを生む。 クランドの残したモノの中でも、 これは本当に厄

かとまかここは、介だ。 弱々しく取り縋るクズハをもうしばらく見ていたい、などという邪な欲望を今は押し殺 心に痛みを与える良心に従い、 クズ ハを安心させてやることに

し、スレイは告げる。

「大丈夫だ。何も心配することはない。 タマモには、 お前の今までの行動は何も見えて

ないから」

う、 嘘ですっ! タマモ様の 順 はこのディラク島全土に届 くのです 0 0

そのことならスレイも〝識〟っている。で起きた出来事が見えていない訳がっ!」

だからこそ、 その 、眼、を惑わす為に結界を張った上で、 このような馬鹿げた悪戯をし

ているのだ。

なので軽く尋ねる。

「それじゃあ聞くが、 クズハ。 何故タマモは全く動かない?」

屋敷に居る筈のタマモは、 今のところ、全く以て何の反応も示してい

慌てて、屋敷の方を振り返るクズハ。

「え? え?」

を感じるに止めている。 スレイはタマモと対面した時に初めてその姿を見る為に、敢えて今は しかし、 クズハはタマモの気配ではなく、その姿を直接、視、 て

いた。

そしてクズ ハは、今気付 13 た というように、 困惑に顔を歪めた。

ないものがある。 美少女が、なりふり構わず弱々しい姿や素顔をさらけ出すというのは、それだけでも堪ら そんなクズハを見て、これは惜しいことをしたかな、 とスレイは思う。確かに規格外

を見せたことだろう。ということは、そんなデキる女としてのクズハを見てから今のクズ 普段であれば、間違いなくその クールな容貌のままに、タマモの従者として完璧な所作

ハと接したなら、ギャップのせいでより可愛らしく感じられたはずだ。

そんなことを考えているスレイの心を、またも良心の刃が突き刺してきた。

いかな物理攻撃や精神攻撃、 流石に自分自身の内側からの攻撃には弱い。 その他あらゆる種類の攻撃を完全に無効化できるスレ

どうにもこうにも勝手が掴めないスレイ。

クズハは訳が分からないといった様子で尚も問い掛けてくる。

「ス、スレイ様っ?: これはいったいどうなってっ?!」

に歩いて来る俺達の姿と、 「ああ、屋敷に結界を掛けさせてもらっている。今のタマモには、用意された道を素直 門前でそれを待って静かに佇むクズハの姿が見えているだろ

うさ

<u>う</u>、 嘘?

ろう。 の力を最も良く知るのは、傍に仕え続けたクズハなのだ。信じられないのも無理はないだ驚愕の表情を浮かべ、首を左右に振るクズハ。神にも匹敵する神獣であるタマモ――そぽうがく

だが舐めてもらっては困る、 とスレイは思う。

たかが神、 いわんや神獣が何程のものだと言うのか

スレイ相手には、どんな力も児戯に等しい。スレイに勝てる相手など、あらゆる世界にも、 その外にも存在しない

だから笑って言う。

嘘じゃないさ。 ほら

結界を操作してみせるスレイに、 クズハ は驚き目を丸くした。

「タマモ様が見えなくっ、 いえ、 屋敷の中が全く……」

29

「なんだったら、好きな物を見えるようにしてやろうか。 それくらい造作もないといった感じで告げるスレイを、 それじゃあ本当に?」 その特別製の 唖然として見返すクズハ。

30

とじゃないか そもそも出会い頭にクズハを驚かせたのだって、 「ああ、だから先刻からそう言ってるだろう? クズハの『眼』を軽く誤魔化したってこだいたい、今更驚いてもらっても困る。

そして、呆然とした口調で尋ねる。 肩を竦めるスレイに、クズハも最初の出会いを思い 出し、 恥ず かしがって頬を染めた。

「……スレイ様、 貴方はいったい何者なのですか?」

「〝絶対最強〟 の〝人間〟様さ」

しかしクズハは首を横に振りながら否定した。

「嘘です。探索者といえども、 人間がそこまで強大な力を……」

「さて、幻術でタマモに、視、せている俺達の姿も、そろそろここに辿り着く頃だな。 あり得ない、と表情で語るクズハだが、スレイは少しばかり天を見上げて呟く。

角ここまで仕掛けたんだ、 無駄になっちゃあつまらない」

『主よ、またやる気か?』

「さっきので懲りなかったの?」

ディザスターとフルールが呆れて言う。

その二つの声を聞いて、 ビクリと身を震わせるクズハ。

二匹を改めて〝視〟て、 ので、今までは気にしてなかったのだろう。スレイの計り知れぬ力を実感しただけでなく、 ディザスターとフルールの存在に気付いてはいても、スレイにばかり意識が向いて 自らには理解できない規格外の相手だと知り、 思わず怯んだよ

「大丈夫だ。神獣ともなれば、 「大丈夫だ。神獣ともなれば、流石に肉体も通常の生理的反応を超越している。スレイはニヤリと笑い、ディザスターとフルールに答える。

いなことにはならないさ」

あの? どういうことでしょう?」

思わず問い掛けるクズハ。

クズハはスレイ達の会話が全く理解できず、困惑するばかりである。

何かにつけて良心が痛むのは厄介だな、

つ

そんなことはおくびにも出さず、平然とした顔で告げる。

またも心の痛みを覚えるスレイ。

とと同じだな……ああ、 何も気付かせず、 どういうことかって? いきなり正面から乗り込んでやるのさ。要は、 それについては何度も繰り返すが、やりすぎてしまい悪かった。 簡単な話さ。俺はこれからタマモを不意討ちするんだよ。 さっきクズハにやったこ

真摯に謝罪するスレイ。

ことは分からない。 たのではないかと思うだろう。 スレイの知り合いがこの光景を見れば、 だが当然、 クズハは普段のスレイを知らないから、 ほとんどの者がスレイの頭がどうかしてしまっ そんな

マモの身のみを案じ、 そして驚かされたことも、醜態をさらしたこともどうでも良いとばかりに、 詰め寄ってくる。 主であるタ

ことです。あの方は、そのような悪戯心で汚して良い存在ではっ!」「そんなっ?」タマモ様に対して、私にしたのと同じ真似をするなど、 あっ てはならな

クズハのタマモに対する敬愛の念は、男に対する恋愛感情ごときで揺らぐような物では

もっと高いレベルにあるのが容易に見て取れた。

母や姉に対するような甘えのような感情も見受けられる。

の深さも当たり前のものだろう。 まあ、彼女らが共に過ごしてきた時間、 そしてその関係性を考えれば、 それだけ Ó 想 11

ちできない。 からと言って、 くらスレイがあらゆる女性の心理を解し、最も効率的に攻略してい 悠久の歳月をかけて密接な関係を築き、 育まれてきた信頼には到底太刀打造をいる。 く術を心得て

だから、微かに笑い、 クズハを安心させる為にこう告げる。

超越種だ。それは、ずっと共にあったクズハが誰よりも良く知っていることだと思うが?」 構造からして探索者以上に生物レベルを超越している。クズハが心配する必要もない程の 「なに、心配は要らん。九尾の狐であるタマモは神獣の中でも別格の存在だ。 その身体の

「それは……そうですね」

スレイの言葉に得心がいったのだろう。

ていた。 落ち着きを取り戻し、姿勢を正すクズハ。その表情も、 最初に見たクールな表情に戻っ

そしてクズハはスレイに対し、こんな疑念を投げ掛けてくる。

身が結界の内部に入ってしまえば無意味ではありませんか。屋敷に押し入り、 尽きますが……しかしスレイ様。いくら屋敷に結界を張っていると言っても、 不意討ちするなど、夢のまた夢だと思いますが? 「強大な力を持ち、幻術を得手とするタマモ様をも惑わす結界を張るなど、驚きの一言に スレイ様自 タマモ様を

来の話し方であろう冷静な口調である。

愛いと思うと共に、 その言葉の節々に滲み出る、 申し訳なくも感じてしまうスレイ。 タマモへの絶大な信頼。 なぜなら タマモを誇る様子が垣間 可

33 「すまないクズハ。屋敷内部で結界が意味を成さないという、 その前提は成り立たない

34

「正確に言うと、俺は結界を〝張って〟 そんなクズハの耳や尻尾を愛でたいという衝動を抑えながら、フクズハはまたも表情を崩し、キョトンと無防備な顔を覗かせた。 いるのではなく、 既に屋敷の周辺から内部にまで、 スレイは続ける

完全に結界を〝浸透〞させているんだ」

「嘘っ!!」

**驚愕に目を見開くクズハ** 

ならば、理解の及ぶ範疇だ。高等な技術ではあれど、できる人にはできる、 一般に、対象の周囲に結界を張るとか、結界で覆って内部を完全に作り変えると言うの

スレイが言ったのは、対象範囲にある素粒子の一粒一粒に到るまで、完全に結界を構 だが、結界を浸透させるというのはそもそもどういう意味なのか?

高等とか、超高等とかいうレベルの話ではない。言葉で言い表せる範囲を超えた絶技だ。 -対象全域を、結界そのものと化した素粒子で埋め尽くすということだ。

慌てて屋敷を振り返り、 クズハは暫く考え込んでいたが、ようやくスレイの言葉の意味を理解したらしい 懸命に、眼、を凝らす。真偽を確認しようとしているのだろう。

しかし、何ら、視、ることは叶わなかったようだ。

クズハは、 困惑の表情でスレイを仰ぎ見た。

のような様子は〝視〞えないのですが……」 の上で伺います。本当にそのような術を行使されているのですか? 「あの、スレイ様。このような言葉、お客人に対し、 そういう結果になるのも、まあ当然だ。スレイの術技は 何より貴方様個人に対し失礼と承知 霊眼、 程度で見破れるレ 私の 順

スレイは安心させるように微笑みを浮かべてやる。

こうしてワンクッション置いてやることで、クズハは落ち着きを取り戻す。

クズハが冷静になったのを確認し、スレイは質問に答えた。

言っても、、神眼、を持つタマモでさえ、結界の浸透に全く気付いていないだろう?」 は、真なる神眼、を持つ者だけだろう。現に、いくら予期せぬ不意打ちで術を行使したと 者など、成長する〝眼〞である〝心眼〞を遥かなる高みにまで成長させた者か、もしく 「いったいスレイ様は何者なのですか? 「結界が周辺一帯に完全に浸透していることは、間違いない。だがクズハに分から 恥に思う必要はないぞ。何せこの結界技法は、〝霊眼〞は勿論、遥か上のランクの であっても見破ることは至難の業だろうからな。この結界技法を容易く見破れる 先日刹那のみ出現したという、 タマモ様ですら

その実態を把握できなかったと語られた異常なまでの力の高まりが、 なる者との決戦の、ほんの僅かな余波に過ぎないということは、 タマモ様より伺っており スレイ様とクランド

しつらえだった。

ます。 タマモ様ですら計り知れぬというその力、私如きが理解できるはずもありません

36

が……しかし、それにしても、 これはあまりに異常に過ぎるかと……」

スレイはそれを見てやはり可哀想に思ってしまうが、本当に、訳が分からないといった様子のクズハ。 \_ つだけ絶対に訂正しなけ ń ば な

らないことがある。よって決然と告げた。

だ。命をかけてクランドと戦ったあの時に比べれば、こんな結界技法など、それこそ児戯「「、」、甚違しを引してよく。今の俺の力は、クランドとの戦いの後の搾りカスみたいな物 にも及ばん」 「一つ勘違いを正しておく。今の俺の力は、 クランドとの戦いの後の搾りカスみ たい

「つ!?

そう聞いて、耳も尻尾も逆立てるクズハ

ああ、 また驚かせてしまったか。 申し訳ないとスレイは思うが、 こればかりは

てもはっきりさせておかねばならないことだった。

スレイにとって、クランドとの戦いは何にも勝る尊いものだ。 この程度の技法と同列と

語られるなど許しがたい。

スレイは気付かぬ内に、 闘志すら解放し てい

慌てて自らを鎮めるスレイ。

すると後ろから、 呆れながらも論す声が聞こえてくる。

「主は、 あの男のことになるとムキになり過ぎる』

「行き過ぎだよね~?」

そんな二匹の声を無視して、スレイはクズハを宥めるように、

「それじゃあ、早速行ってみようか。結界の浸透の効果については、 実際に進入して不意

打ちしてみればはっきりするだろう?」

僅かに緊張を解き、「は、はい」 頷くクズハ

それを確認すると、 スレイは屋敷の門へ向かって歩き出した。

「いやいや、それじゃあ不意討ちにならないだろう? お待ちください、スレイ様! スレイ様はお客様なのですから、私がご案内を‼」 なに、内部の造りは全て分かって

いる。 問題ない」

理屈にならない理屈を言い残すと、スレイは無造作に門を開き、突き進んで行く

屋敷の中に入ったスレイの目に映ったのは、 クズハも慌てて後を追う。半ば呆れつつ、ディザスターとフルールがのんびりと続く。 ディラク風の床や壁、 それもかなり古式の

屋敷の構造を既に把握しているスレイは、 部屋と部屋を仕切る襖を次々と開け、

が居る一際大きな部屋へと突き進んで行った。

37

気に襖を開け放った。 本当にタマモはこちらに全く気付いていない。 ことに驚愕の表情を浮かべた。スレイの結界技法によりあらゆる知覚機能が誤魔化され、 スレイは、 目的の部屋に辿り着くと、

後方のクズハは、スレイの言った通り、どこまで進んでもタマモが反応する気配がない

たのもー……」

そこでスレイが目にしたのは、言葉にならない程美しい存在だった。美そのものと言う ふざけた口調で呼び掛け、中に踏み込んだスレイだったが、思わず絶句していた。

ほかない存在が、キョトンとした瞳でスレイを見つめていたのだ。

が駆使する自動無効化も効かなければ、任意無効化も意味を成さなかった。 これはただ美であり、能力でも技術でもない。よって、敵の能力や技術に対してスレイ どのような美的感覚の持ち主であっても、 ただ美しいと認めるしかない美。

と断言できる。 たとえ無効化が通じたとしても、 それでどうにかなるレベルの物ではない

している。更に遅れて到着したクズハですら、普段から見慣れているはずなのに固まって 現にようやく追いついたディザスターとフルールでさえ、そこに在る美を前にして硬直

スレイだけは絶句こそすれど、硬直などはせず、最初から冷静に観察し分析していた。



## 立ち読みサンプル

なるほど、圧倒的というのも生温い美だ。まさに美の極限。

今まで見た美しいもの全てが霞む程だ。 これに比べれば、エルフのエミリアやハイエルフのティータですら足下にも及ばない

その美しさは容姿のみならず、内面からも滲み出て、 並の人間ならば、見ただけでその目を潰し、全てを投げ捨ててひれ伏すだろう。 強烈な波動のように襲 Vi

……しかしスレイにとっては、そう考察する、 ただそれだけのことだった。

クランドと共に、魂の階梯を駆け上がり、 果てなき高みへと到り、 尚どこまでも昇り続

けていこうとしたスレイなのだ。

輝きに比べれば、今目にしている圧倒的な美でさえも物足りない。そう断言できる。 戦いが終わり、 道程は一時中断されてしまっているが、 あの刻自分達が放って いた魂 0

キョトンとスレイを見つめる瞳は瑠璃色である。目は大きく切れ長ながらまそんなことを考えながらも、スレイは冷静に美の化身を観察し続けていた。

ちた雰囲気が漂い、安らぎさえ感じさせる。 目は大きく切れ長ながらも、 慈愛に満

され、 神の手を以てしても不可能だろうと思われる程、 最善のバランスを保っている。 完璧な配置によって顔

0

18

ツ が構成

肌はどこまでも白く、瑞々しく生気に満ち、 大理石や絹になぞらえるのも馬鹿らしい 健康美を感じさせる。 その肌理細 温かさは喩

を超え、床に届いて広がるだろう。 を広げている。その様は世にも美しい敷物のようだ。 タマモは布団の上に寝そべり、 枕にしなだれかかって、落ち着いた輝きを放つ金髪 彼女が立ち上がったなら、 髪は足下

身長は、 クズハよりやや低め。 寝姿からそう見て取るのは、 スレイにとって容易いこ

で、 逆に胸はクズハよりも二回りは大きく、 絶妙なボディラインを描いている。 それこそが最善のバランスであると思わせる形

脚も長く、そのラインも見事なまでに美しい

身体のどこをとっても、それぞれが互いに引き立てあって調和 して V

美そのものを体現する容姿--それは反則的なまでに美しかった。

そして、 尚あり得ないのは、 その容姿が美の本質ではないということだ。

外見など関係なく、 自ら存在を主張する、 圧倒的な美。

美という最高位の概念が、この世に肉体を持って現出した。

夕

マモとは、

そう

、今の、自分は未だ見たことがない が、 恐らく美の女神ミ ユ

そう仮定するなら、 タマモは美の女神に匹敵するということになる。

いう存在なのだろうと推測する。

シーカー6